

A 語句の意味と読み

(1) けいようこうせり（歴史的仮名遣いでは「けいようこかうせり」）／★「-au」は「-おう」に直す。「形容」＝すがた・かたち、「枯槁」＝木が枯れるようにやせ衰えること

(2) あなた。相手を敬ってという二人称。／★「わが子」ではない。漢文の「子」は、目の前の相手を敬って呼ぶ言い方

(3) (酒の) 酔いがさめている。正気である。ここは、世の乱れに酔わされず、正しい判断力を保っていることのたとえ。／直前の「酔へる」と対になっている。酒の話ではなく、世の中とのつきあい方のたとえ

(4) 糟＝酒かす。醕＝味の薄い酒。／どちらも上等でないもの。「みんなといっしょに酔ってしまえばよい」という漁父の勧めのたとえに使われている

(5) まっ白に輝くように、けがれの無い清らかなこと。ここでは屈原自身の潔白な身・生き方をたとえている。／すぐあとの「世俗の塵埃（＝俗世間の汚れ）」と正反対の言葉として置かれている

(6) にっこりとほほえむさま。／「爾」はようすを表す語につく字。声を立てて大笑いするのではなく、静かにほほえむこと

(7) 冠を頭にとめるひも。／冠は役人である身分の印。次の句の「足」と対になっていて、上（冠）と下（足）を対比している

B 句法

(8) 「～に非ずや」で「～ではないか」と念を押して尋ねる言い方（疑問）。ここは「あなたは（あの）三閭大夫ではありませんか」の意。「～ではないか、いやそうだ」と反語として説明する教科書もあるので、お使いの教科書に合わせる。／相手が誰であるかを確かめる問いかけ。答えを求めているというより、驚きをこめた念押し

(9) 動詞「放つ」の未然形「放た」＋助動詞「る」で、受身。「追放される」の意。白文では「是以見放」と書かれ、「見」が受身を表している。／★漢文の受身の目印は「見」「被」「為～所…」「於（于）」。「見」の型

(10) 反語（「何ぞ～ざる」＝どうして～しないのか、いや、そうすればよいではないか）。世の濁りに逆らわず、いっしょに濁ってしまえばよい、と屈原に勧める気持ち。※「どうして～しないのか」という疑問（勧誘）と説明する教科書もあるので、お使いの教科書に合わせる。／★「何ぞ～ざる」は「しないのか＝すればいいのに」と相手に勧める型。次の「何ぞ其の糟を…歎らざる」も同じ形

(11) 「寧ろ」は二つを比べて、「いっそ～するほうがまだ」と一方を選び取る言い方。「とも」は逆接の仮定条件で「たとえ～としても」の意。あわせて「たとえ川に身を投げて魚の腹に葬られようとも」となる。／「寧ろ～とも、安くんぞ…んや」で一続き。「いっそ死んでも、どうして…できようか」という強い拒絶になる

(12) 読み＝いづくんぞ（本文のルビは歴史的仮名遣いで「いづくんぞ」）／句法＝反語。「どうして～できようか、いや、できはしない」の意。／★「安くんぞ」＋文末「～んや」は反語の型。「～んや」の「ん（む）」は推量。歴史的仮名遣いの「づ」は現代仮名遣いでは「ず」に直す

(13) 「清まば」は未然形＋「ば」で仮定条件。「もし（水が）澄んだならば」の意。「べし」は可能で「～することができる」（白文の「可以」にあたる）。「～するのがよい」と適当に訳す教科書もあるので、お使いの教科書に合わせる。／★未然形＋「ば」＝もし～ならば（仮定）、已然形＋「ば」＝～ので～すると（確定）。次の「濁らば」も同じ仮定

C 主語・指す内容

(14) 漁父（漁師の老人）が屈原に問いかけた言葉。「斯に至れる」＝（追放されて）このようにやつれ果てたありさまになってしまった、ということ。／直前の「漁父見て之に問ひて曰はく」の「之」が屈原にあたる

(15) 世の中の人々がみな濁っているのに自分ひとりが清く、人々がみな酔っているのに自分ひとりが醒めていたこと（④⑤の内容）。／★「是を以て」＝そういうわけで。直前の二文がそのまま理由になっている

(16) 漁父の言葉。屈原に対して、世の中が濁っているのならいっしょに濁ってしまえばよい、と世に合わせて生きること勧めている。／「聖人は物に凝滞せずして、能く世と推移す」を受けた具体例にあたる部分

(17) 主語＝漁父。屈原が自分の勧めを受け入れず、清廉を守り通すと言い切ったので、それ以上は説かず、笑って舟をこぎ去った。／⑬「莞爾として笑ひ」とセットで読む。言い争わずに立ち去るところに漁父の人物像が出ている

D 口語訳

(18) 世の中じゅうの人がみな濁っているのに、私ひとりだけが清らかである。人々はみな酔っているのに、私ひとりだけが醒めている。／表現技法＝対句（「世を挙げて皆濁れる／衆人皆酔へる」と「我独り清めり／我独り醒めたり」が対応し、屈原の孤高さを際立たせている）。／★二文が同じ組み立てで並ぶ対句。「皆」と「独り」の対比をはっきり訳に出す。漁父の言葉⑨⑩も同じく対句になっている

(19) 聖人は、物事にこだわって行きづまることがなく、世の中の移り変わりに合わせてうまく身を処していくことができる。／「能く」＝～することができる。漁父の考える理想の生き方を述べたところ

(20) どうして、その泥をかき混ぜて濁らせ、その波を立てないのか（＝そうすればよいではないか）。／反語なので、「～すればよいではないか」という勧めの気持ちまで訳に出す

(21) どうして、まっ白に清らかなこの身でありながら、俗世間のちりやほこりをかぶることができようか、いや、できはしない。／反語なので「いや、できはしない」まで書く。「蒙る」＝身に受ける・かぶる

E 内容・記述

(22) 楚の朝廷を追放され、行くあてもなく川や沢のほとりをさまよい歩いて、嘆きの詩を口ずさむ日々を送っていたから。／直前の「屈原既に放たれて、江潭に遊び、行き行き沢畔に吟ず」がそのまま理由になる

(23) 世が濁れば共に泥をかき混ぜ、人が酔えば共に酒かすを口にせよという例。(三十四字)／★⑦⑧の「聖人は…」という考えを、⑨(泥をかき混ぜて波を立てる)と⑩(酒かすを食べ薄い酒をすする)という身近な行いに置きかえて勧めている。抽象論のままで終わらせない

(24) たとえ川に身を投げて魚の腹に葬られることになっても、俗世間に染まって自分の潔白を汚すことだけは決してしない、という、命よりも清らかさを重んじる妥協のない生き方。／★「死んでもよい」と「汚れたくない」の二つをセットで書く。片方だけでは足りない

(25) 水が澄めば冠のひもを洗い、濁れば足を洗うように、世の中のありさまに応じて自分の身の処し方を変えていく、こだわりのない柔軟な生き方。清らかさを守って妥協しない屈原の生き方と、鋭く対比されている。／★この文章の主題は「清廉を貫く屈原」と「世に合わせる漁父」という二つの生き方の対比。記述の答えはここに集まる

F 文学史・故事（本文全体をふまえて答える）

(26) 中国の戦国時代、楚の国の政治家であり詩人。王と同じ一族の出で、はじめは王に重く用いられたが、周囲のねたみと讒言によって遠ざけられ、追放された。『離騷』などの作品が『楚辞』に伝わる。／讒言(＝人を陥れる悪口)で王に疎んじられた経緯は、『史記』屈原列伝の前半に書かれている

(27) ここに載せた本文は、『楚辞』に収められた「漁父」(漁父辞)である。とくに結びの「漁父莞爾として笑ひ…滄浪の水清まば…」は『楚辞』にしかなく、『史記』屈原賈生列伝にも同じような問答は載っているが、この結びはなく、語句も「其の流れに随ひて」「常流」「温蠖」などちがっている。『史記』は前漢の司馬遷が著した歴史書で、本紀・列伝などを立てて人物を中心に記す紀伝体で書かれている。／★滄浪の歌までついたこの形は『楚辞』。教科書が『史記』の本文を採っている場合は語句がちがうので、お使いの教科書の本文で確かめること

(28) 石を抱いて汨羅(べきら)の淵に身を投げ、命を絶ったと記されている。／★⑪「寧ろ湘流に赴きて」の言葉が、この最期と重ねて読まれる。屈原をしのぶ言い伝えが、端午の節句にちまきを川へ流す風習の由来として語られてもいる(あくまで言い伝え)

【現代語訳（全文）】

【冒頭（屈原の姿）】

屈原は、(楚の朝廷を)追放されてしまって、川べりをさまよい歩き、沼や沢のほとりを行きながら詩を口ずさんでは嘆いていた。顔つきはやつれ、すがたは木が枯れたようにやせ細っていた。漁師の老人がその姿を見て、屈原に尋ねて言うことには、「あなたは(あの)三閭大夫ではありませんか。どういうわけで、こんなありさまになってしまわれたのですか」と。

【屈原の言葉】

屈原が言うことには、「世の中じゅうの人がみな濁っているのに、私ひとりだけが清らかである。人々はみな酔っているのに、私ひとりだけが醒めている。そういうわけで、私は追放されたのだ」と。

【漁父の勧め】

漁師が言うことには、「聖人は、物事にこだわって行きづまることがなく、世の中の移り変わりに合わせて、うまく身を処していくことができるのです。世間の人々がみな濁っているのなら、どうしてその泥をかき混ぜて濁らせ、その波を立てないのですか(そうすればよいではありませんか)。人々がみな酔っているのなら、どうしてその酒かすを口にし、その薄い酒をすすらないのですか(そうすればよいではありませんか)」と。

【屈原の拒絶】

「……いっそのこと湘水の流れに身を投げて、川の魚の腹の中に葬られることになろうとも、どうして、このまっ白に清らかな身でありながら、俗世間のちりやほこりをかぶることができようか、いや、できはしない」と。

【結び（漁父の退場）】

漁師はにっこりとほほえみ、かいを動かして舟をこぎ去っていった。そして歌って言うことには、「滄浪の水が澄んだならば、その水で私の冠のひもを洗うことができる(洗えばよい)。滄浪の水が濁ったならば、その水で私の足を洗うことができる⁶(洗